第11回全国被災地語り部シンポジウムin東北

東日本大震災から15年、未来に教訓どう残す

3月1、2日
南三陸ホテル観洋

今年の3月11日で、東日本大震災の発生から15年を迎える。若者への伝承の在り方や震災遺構などの重要性を伝え、震災の教訓を世界に向けて語り継ぐ「第11回全国被災地語り部シンポジウムin東北」（阿部隆一郎実行委員長）が、宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋で3月1日から2日にかけて開かれた。県内外で遭遇した震災体験者や伝承活動に携わる関係者ら約300人が参加した。「震災を風化させないための語り部バス」（以下、語り部バス）のエクスカーションプログラムや、パネルディスカッション、懇親会などを通じて、震災被害を風化させないために今後取るべき方策について意見交換された。

教訓語り継ぎ、新たな「国の力」に

シンポジウムは、語り部バスのエクスカーションプログラムの後に開幕。1日を通して、現役の語り部や学生ボランティアなどを招いて行われたメインディスカッションやさまざまな側面から防災を考える複数の分科会、海外の震災・復興研究者らによる国際セッションなどが行われた。

阿部氏（右）と吉田氏

開会セレモニーでは、南三陸町の戸倉地区水戸辺に伝わる「行山流水戸辺鹿子躍」が披露された。その後、実行委員長を務める阿部長商店南三陸ホテル観洋の代表取締役副社長・阿部隆一郎氏が登壇したほか、国土交通省東北運輸局長の吉田昭二氏が来賓あいさつを行った。

阿部氏は冒頭、シンポジウムの趣旨を説明。過去10年間シンポジウムを継続実施しており、全国の被災地と関係を構築し、ネットワークを拡大してきた過去を紹介した。

吉田氏は、東北運輸局・企画観光部長時代の2014年に策定した「東北観光基本計画」を紹介。同計画に明記されている主な取り組みの一つに、「震災からの観光復興記憶の伝承と復興ツーリズムの促進に対する取組み」があることを強調した。「観光は、国の光を観る、その国の力を観るということ。しっかり次世代に向けて（震災の出来事を）語り継いでいく。これが力であり光だ。この光を次世代に語り継いでいただくことを、語り部の皆さんに行っていただいている」と感謝を述べ、今後の活動の発展にも期待を示した。

全プログラム終了後は、北淡震災記念公園総支配人の米山正幸氏によって「全国震災語り部南三陸宣言」が読み上げられ、満場一致で宣言が採択された。

「震災語り部バス」に乗車

震災遺構に学ぶ「津波の恐怖」
写真と実地見学で理解深める

1日の午前中に行われたエクスカーションプログラムでは、南三陸ホテル観洋が運行する語り部バスに乗車。周辺の戸倉小学校（跡地）、旧防災対策庁舎周辺、そして阿部長商店が運営していた結婚式場の高野会館（震災遺構）を、約1時間半かけて巡った。

◆　◆

語り部バスは、東日本大震災の被災者がその体験を伝え、防災意識を高めるため、2011年に開始したバスツアー。津波の被害により景色が一変したホテル周辺を巡り、街の様子を見て回るだけでは分からない実体験や教訓を伝えている。

バスは毎日運行。60分間かけて巡る「通常コース」に加え、高野会館の遺構見学を含む90分間の「高野会館特別コース」の2コースを用意している。今回のプログラムでは後者を催行。各スポットで、同館のスタッフが震災当時の様子や現在の状況を、写真なども交えて説明した。

高野会館ではバスから下車し、ヘルメットを着用して遺構内を見学した。3階天井まで津波に飲み込まれながらも、各所に残る遺品や食料品のごみなどが残る様子を見て、参加者らが言葉を失う場面も見られた。

語り部バスの催行人数は1人から。予約は、宿泊前の電話か、宿泊中は前日夜9時までにフロントで受け付ける。料金は、通常コースが500円、高野会館特別コースが千円（小学生以下の子供はいずれも半額、0～1歳までは無料）。団体客は別途相談。

高野会館の遺構内での見学の様子。カセットテープやタイムカードなどが、当時の状態のまま残されている

シンポジウム2日目の3月2日にも語り部バスのエクスカーションプログラムが行われた。ここではオプションツアーとして、「気仙沼ての日を追体験するコース」「石巻を感じ、学ぶコース」が催行された。

高野会館の全景。3階の天井まで津波で浸水した

語り部バスの車内の様子

語り部活動の成果と課題

防災意識強い人材育成に成功
課題は避難所運営や学校教育

メインディスカッションでは、現役で活躍する語り部3氏を招き、「これまでの15年、これからの15年」をテーマに意見交換が行われた。各氏のこれまでの取り組みと、記憶の継承に必要なこと、今後に向けた課題などを共有。15年間の災害教育により、防災意識の強い人材を育てられた一方で、避難所設備の充実や防災への予算強化、学校教育の現場への防災教育の浸透などに今後取り組んでいく必要があるとの認識が示された。

多くの人に影響
交流拡大も推進

前半、各登壇者が過去15年を振り返った。

2013年3月から語り部活動を開始し、現在は全国各地で講演活動を行っている陸前高田市被災地語り部くぎこ屋代表の釘子明氏は、活動開始当時に知り合った学生が成人し、災害関係のボランティア活動を始めたことが活動の成果だと振り返った。一方で、自身も高齢化していく中で、これからどのような形で語り部活動をしていけばよいか思案している現状を告白した。

津波で多くの児童・教師が犠牲となった石巻市立大川小学校で、当時国語の教師を務めていた大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎氏は、コロナ禍に本格化させたオンラインでの講演に多くの参加があったと報告。こうした活動の維持に加え、当時起きた出来事やそこでの知見をより広く定着させていくため、教科書で紹介してもらえるよう教育委員会などへの働きかけの必要性も訴えた。

福島県での原発事故の記憶を語り継ぐ、富岡町3・11を語る会代表の青木淑子氏は、複合災害（原子力災害）の伝承に向けた取り組み内容を紹介。15年間の一つの成果として、国内唯一の原子力災害伝承施設「東日本大震災・原子力災害伝承館」の開設を挙げ、修学旅行で全国から生徒が訪れていると報告した。県の支援により語り部ネットワークを構築してきたが、今後は交流拡大や人材育成で「自走」していくことも必要だと強調した。

教育に積極投資を
活動機会の提供も

後半には、これからの15年でどのような活動を展開していくか意見交換が行われた。

佐藤氏は、学校教育の現場で防災学習や語り部学習を時間割に組み込む必要性を再度強調。「人の命が救われる」ことへの自治体の積極的な投資につながるとの持論も展開した。

同じく教師経験のある青木氏も、「総合学習」の時間を活用するなど、学校教師とも協力する必要性を訴えた。日本がかつて経験した戦争の出来事が語り継がれているのと同様に、震災学習も学校教育に導入できるとの確信を示した。

震災当時、気仙沼のホテル観洋のホテルマンだった釘子氏は、ホテルを避難所として開放していた運営の記憶を紹介。水の確保やトイレの設置など、国内で災害が発生した際の避難所運営にさまざまな問題があると指摘した。「震災から15年たち、今の中学生は被災者でさえ当時のことを知らない。これは非常に大きな問題だ」と危機感を示し、語り部を派遣する形などで防災教育に役立ててほしいと強調した。

登壇者（敬称略、左から）
コメンテーター
宮本肇（元淡路市総務部長）
コーディネーター
山内宏泰（リアス・アーク美術館館長・学芸員）
パネリスト
・釘子明（陸前高田市被災地語り部くぎこ屋代表）
・佐藤敏郎（大川伝承の会共同代表）
・青木淑子（富岡町3．11を語る会代表）

「仕事をいただくことで（活動を）続けることもできる。この場をお借りして、行政の方々には信じてもらいたい」と訴えた。

コメンテーターを務めた宮本肇氏は、「近年の少子高齢化によって、学校が統廃合され、教育施設の充実にも予算が下りず、（2次災害などを）防ぐことができないのが現状だ」と強調。阪神・淡路大震災の時も当初はさまざまな財政支援があったものの、発災から30年が経過すると予算が縮小されてしまう事例を報告した。全国で避難所の充実、特にトイレの問題などを対処すべきとの意見を述べた。「国の方にも、基金を設置してもらい、さらに充実できるような予算で支えていただけるとありがたい」と要請した。

開幕前夜に特別企画

阿部女将が感謝のあいさつ

シンポジウム開幕前夜の2月28日には、特別企画「シルクロード～人と文化を結ぶ道～水墨画ライブペインティング&モンゴル四弦琴の演奏」が行われた。東京学芸大学の研究員で演奏家の蒙古貞夫氏（モンゴルツアー）が、モンゴルの伝統擦弦楽器で独奏曲5作品を演奏したほか、中国出身の画家・芸術博士の李焱氏が、蒙古氏の音楽に合わせて水墨画のライブペインティングを実演した。

中国西部の河西回廊（甘粛省）で作られるシルクロードキリアンワインの試飲会も行われ、館内宿泊者を楽しませた。

同館の女将・阿部憲子氏も登場＝写真。「（震災から）15年の節目に、芸術と音楽の力を使って交流の場が設けられて大変光栄でうれしく思っています。このような現在を迎えられているのは、日本中、世界中の皆さまから応援をいただいたおかげだと本当に感謝の気持ちでいっぱいです」と笑顔であいさつした。

全国被災地語り部

南三陸宣言

私たちは本日、東日本大震災から15年が経過する、ここ南三陸町に集い、自然災害の被災地で語り継ぐ使命を担う者として、改めて決意を共有しました。

災害は多くの尊い命とかけがえのない暮らしを奪いましたが、同時に未来へ備える知恵を私たちに残しました。

語りは過去を振り返る回想ではなく、未来の命を守るための行動です。

閉会にあたり、幾度も甚大な自然災害を被ってきた東北の地から、ここに宣言いたします。

1．私たちは、被災の事実と教訓を語り継ぎ、世代を超えて命を守る知恵として伝え続けます。

2．私たちは、被災地相互のネットワークを更に広め、経験と教訓を国内外で共有し、防災・減災の意識の向上に努めてまいります。

3．私たちは、未災地を含むすべての地域に自助・共助・公助の意識を高め、語りの灯を未来へ手渡してまいります。

震災の風化を防ぎ、震災の教訓を伝承するため、これまで11回のシンポジウムで構築されたゆるやかなネットワークを活かし、多文化、多様性を尊重しながら全国被災地語り部シンポジウムを継続してまいります。

南三陸町の千葉町長も登壇

語り部は「防災の教科書」
生きる力を育む大切な財産

懇親会であいさつする南三陸町の千葉町長

1日の夜には、懇親会が開かれた。冒頭の来賓あいさつでは、南三陸町の千葉啓町長が登壇。「私たちは多くの命を失い、街の姿も大きく変わった。その中で未来を支えてきたのは、地域の皆さまのたゆまぬ努力、そして活動だ」とし、語り部を担う参加者に対しこれまでの活動の感謝を述べた。

千葉町長は、「語りは、私たちが失ったものを思い起こさせるだけではない。未来の命を守るための知恵で、地域の歴史と誇りをつなぐ架け橋だ。そしてそれぞれの被災地が歩いてきた復興の証そのものだ」と強調。「震災の年に生まれた子供は、今年高校生となる。震災を知らない世代がますます増えていく。だからこそ、語り部の皆さまの言葉が、次の世代にとっての防災の教科書となる、生きる力を育む大切な財産となるものと考えている。本日の会は、語り部の皆さまの思い出を共有し、次の世代へどのように伝承していくか、それを語り合う実りのある場となることを心より願っている」とあいさつした。

海外研究者招いた国際セッション

日本の語り継ぎ、海外からも注目
「未来へのメッセージ」として評価

1日の懇親会の後には、「日本の困難な記憶と記録を国際的な視点から考える」と題する国際セッションも行われた。イタリア、トルコ、沖縄県出身の研究者や学生が参加。災害や戦争の記憶をいかに伝承し、未来へつなげていくか多角的な議論が交わされた。伝承は単なる過去の出来事ではなく、未来へのメッセージを含むこと、その活動に国境を越えた知見の共有が不可欠であることが重要だと結論づけた。

◆

イタリアのボローニャ大学から参加したアンナクラウディア・マルティーニ氏は、「災害の記憶と感情」が専門。被災地を訪れた外国人が震災を学ぶことでどのような感情や考えを抱くのかを研究しており、自身も2016年以降継続的に東北を訪れていると紹介した。

カナダのモントリオール大学で、母国・トルコでの災害復興のサイクルを研究するファトマ・オズドガン氏は、「トルコも日本のように5年、10年おきに大きな地震が起こる。教訓の伝承ができていないため、大震災が起きても何も変わらない印象がある」と説明。3年前に日本で災害伝承の考え方に触れ、感動した体験を母国にも発信したいと意気込みを語った。

セッションでは、マルティーニ氏とオズドガン氏が、南三陸を訪れた際の体験や、そこで抱いた思いを共有した。

オズドガン氏は、「トルコには災害伝承施設が12カ所しかなく、日本に比べると少ない。日本の伝承施設で感動したのは、将来世代へのメッセージが強いということ。トルコでは、災害が発生した瞬間を伝える内容が多い。もっと（日本の伝承施設を）回りたい」と語った。

マルティーニ氏も、研究室の学生を率いて東北の被災地を回る予定だとした上で、「イタリアもいろいろな災害が起こる。地震への対処法は知っているが、長期的な復旧には大きな問題がある」と自国の課題を共有。各国の復旧に向けた取り組みを見て学んでいきたいと述べた。

なぜ日本で災害を学ぶのかについても、両氏が自身の考えを述べた。

マルティーニ氏は、日本を選んだきっかけに福島の原子力災害を挙げた。複合災害から日本がどのように復興するのかに興味を抱き、その研究のために来日したと語った。

オズドガン氏は、「世界には戦争の伝承施設はあっても、自然災害の伝承施設は少ない。こうした取り組みに力を入れている社会を知りたいという思いで来日した」と説明した。

神戸大学の石川さんは、沖縄の祖父の言葉「命どぅ宝」を紹介。「自分の命を守るために何ができるか。どのように生き延びるかを伝えていくのが重要だと思う」と述べた。

登壇者（敬称略、左から）
・ユリア・ゲルスタ（東北大学災害科学国際研究所准教授）
・アンナクラウディア・マルティーニ（ボローニャ大学助教授）
・ファトマ・オズドガン（モントリオール大学博士課程東北大学災害科学国際研究所客員研究員）
・石川浩之介（神戸大学院生、神戸大学ボランティアバスプロジェクト）
・山地久美子（神戸大学地域連携推進本部特命准教授）